米子市立山陰歴史館所蔵の島根県竹島の写真について
―その由来と 1954 年に開催された「竹島説明展」―

井上 貴央
（鳥取大学名誉教授）

はじめに
1　佐々木謙編集『竹島記』冊子の竹島写真
2　山陰歴史館と佐々木謙が演出した竹島渡海の時代行列
3　「竹島説明展」の開催と「竹島を語る座談会」の開催
おわりに

はじめに

江戸時代には鬱陵島は竹島と呼ばれており、米子城下の町人であった大谷（大屋）家と村川家が幕府の許可を受けて、1618（元和 4）～ 1696（元禄 9）年まで約 80 年間にわたり、毎年交替で渡海して島の材木や海産物を採取して持ち帰っていた。鬱陵島にはニホンアシカが多数生息しており、皮と油の採取を目的に鉄砲でアシカ漁も行われていた。さらに鬱陵島への航海の途中には松島（現在の竹島）があるが、そこでも幕府公認のもとにアワビ漁やアシカ猟が行われていた。アシカの油は灯明油として用いられたようで、米子城下の人々に配られたことが分かっている[1]。このように米子と鬱陵島・竹島は歴史的に深いつながりを持っていた。

1940（昭和 15）年に、米子市の長田芳久はリン鉱石の探査に同行して竹島の様子を 8 ミリカメラで撮影し、「日本海のアシカ狩」という映画を作製した（以下、「長田 8 ミリ映画」と略）。筆者は先にその映画について

1　米子町史編纂のため大正年間に筆写した村川家文書（写）の中にある。『鳥取県郷土史』（鳥取県学務部学務課 編 1932）にもその概略が収載されている。

詳細な解析を行ない、いくつかの問題点を指摘した[2]。

米子市立山陰歴史館（以下、山陰歴史館と略）には、これまで由来が分からない竹島の写真が 5 枚保管されていた。これらの写真を検討したところ、1940 年に長田芳久が竹島を探検した際にスチールカメラで撮影された写真であることが判明した。これらの写真は 1954（昭和 29）年に山陰歴史館で開催された「竹島説明展」を契機として、同館の運営に関与していた米子市立第四中学校教諭の佐々木謙が収蔵したものと思われた。本稿では、これらの写真の詳細を紹介するとともに、佐々木が立案企画した竹島（鬱陵島）渡海の時代行列についても紹介したい。

1　佐々木謙編集『竹島記』冊子の竹島写真

山陰歴史館には、佐々木謙が作製した冊子が保管されている。佐々木古代文化研究（所）『竹島記』という表紙がついた冊子は、後年作製されたと思われる灰色の厚紙のひも付きカバーの中に収納されており、そのカバーの背には『竹島誌』佐々木謙編集と書かれた紙が貼られている（図 1）。

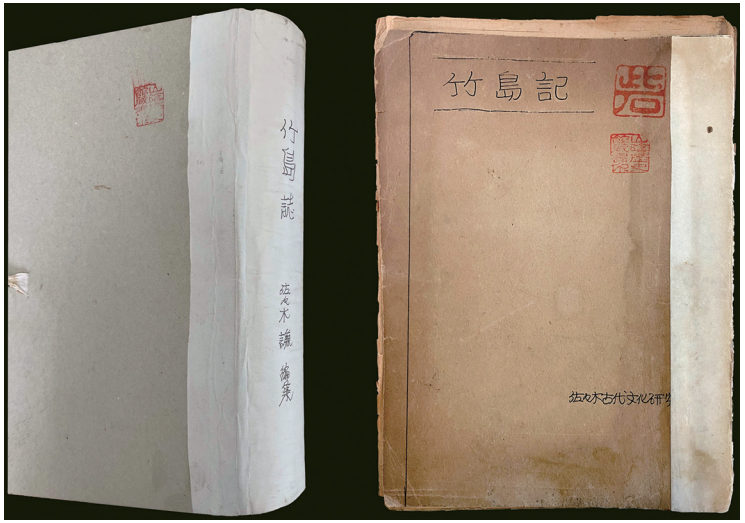

図 1　佐々木謙氏がファイルした竹島関連資料。
右：冊子を包んでいた厚紙のカバー。左：冊子『竹島記』の表紙。

2　井上貴央「1940 年に竹島で撮影された 8 ミリフィルムの検討」『島嶼研究ジャーナル』第 13 巻 1 号（2023 年）32 ～ 60 ページ。

『竹島記』は数々の古文書や奥原碧雲著『竹島および鬱陵島』など竹島関係資料を佐々木自身がガリ版印刷し、佐々木がファイルしたものである。竹島の写真は最初の見開きページに貼付されており、左ページに 2 枚、右ページに 3 枚の合計 5 枚の写真がある（図 2）。大部分の写真には折れに伴う乳剤層の亀裂が認められ、なかには一部折れに沿って破断している写真もあり、写真の保存状態は悪い。左ページの上から右ページの下にかけて、それぞれ写真①～⑤と呼ぶことにし、その特徴などを表に示した（表 1）。

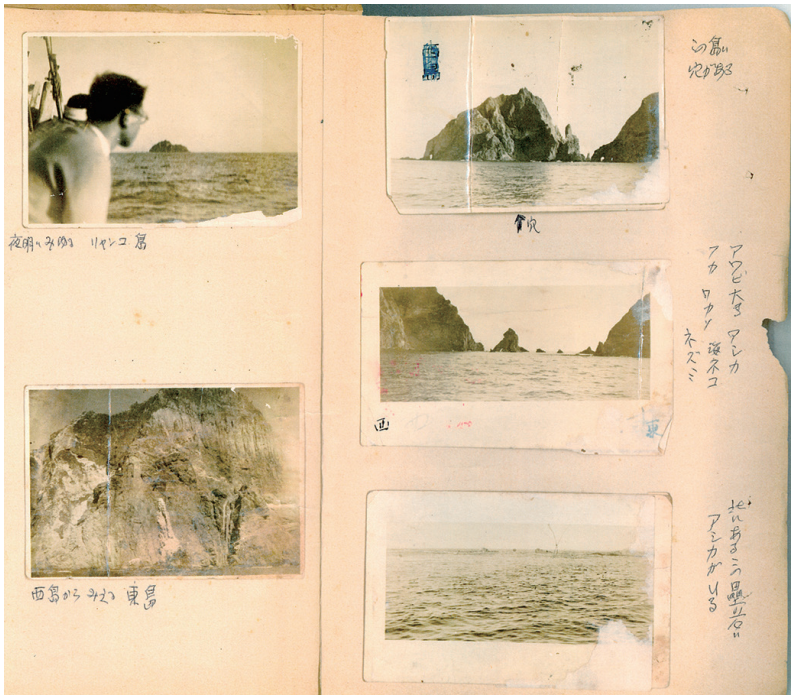

図 2　佐々木謙編集『竹島記』冊子のなかにファイルされていた竹島の写真。写真の周囲には書き込みがある。

写真の大きさをみると、写真①～③は手札サイズ（83 × 108 ㎜）よりもやや小さい。写真④～⑤は画面が横長の写真であり、写真の長辺は手札サイズより大きい。いずれの写真も印画紙はバライタ紙でフェロタイプ乾燥を行って表面に光沢を出している。

台紙から一部剥離している写真の裏面をみると、黒インキによる書き

表 1　佐々木謙編集『竹島記』冊子の竹島写真リスト

写真番号	写真の大きさ（縦×横、単位：㎜）	映像画面の大きさ（縦×横、単位：㎜）	写真の表面の書き込み *	写真の状況	アルバムの書き込み **	写真の同定 ***	備考 ***
①	69 × 99	66 × 95	なし	右上と右下に乳剤層の剥離あり。下縁の一部には別の写真の紙の一部が貼り付いている。	「夜明けにみゆるリヤンコ島」	幸運丸の右舷先に見えた竹島。手前の人物はリン鉱石の専門家の山田慶三郎。	東島の南東約 2km の地点付近から北西に向けて撮影。
②	69 × 99	66 × 95	なし	左 1/3 付近に、写真が折れたときに生じたと思われる乳剤層の亀裂が縦方向に走る。	「西島からみえる東島」	東島側から見た西島。中央に見える白い岩は観音岩。	西島の映像であり、アルバムの書き込みは誤り。五徳島と石原の中間付近から西北西に向けて撮影。
③	69 × 99	65 × 95	右上に、青インクペンで「西島」と書かれているが、その上から他の種類の筆記用具で書き消されている。「西島」の「西」に重なるように黒インクで「東」と書かれているように見える。	左 1/3 と右 1/3 付近に、写真が折れたときに生じたと思われる乳剤層の亀裂が縦方向に走る。右下には、別の写真の紙の一部が貼り付いている。	「この島に穴がある」「↑穴」	南東から見た西島の全景と東島の南西端。西島の山頂および“タンゴン峰”、観音岩、両島の海食アーチ（＃ 2、＃ 3）が見える。	東島の南約 100m の地点付近から北西方向に向けて撮影。
④	66 × 110	40 × 95	左下に黒インクで「西」、右下に黒インクで「東」の書き込みがあるが、後者は文字の上に別の写真の印画紙が薄くかぶさっている。また、それぞれの文字の内側には鉛筆書きで「西」と「東」の書き込みが薄く見える。	画面の右端に写真の折れ曲がりによる乳剤層の亀裂が縦方向に走る。また、横方向にも 2 本の亀裂が認められる。右下には、別の写真の紙の一部が貼り付いている。	「アワビ大きい　アシカ　フカ　ワカメ　海ネコ　ネズミ」	東島と西島の間の海峡の南から五徳島を見た写真。左右に西島と東島の一部が写っている。	東島と西島の間の海峡の南部（扇岩の西方約 50m）から北西に向けて撮影。
⑤	68 × 108	42 × 95	なし	右上から左下にかけて、別の写真の紙の一部が貼り付いている。	「北にあるこの壘岩にアシカがいる」	西島の北の岩礁。左から岩礁＃ 3、岩礁＃ 4、大・小アシカ島が写る。	小アシカ岩（岩礁＃ 2）の東方約 150m から西南西に向けて撮影。

注）* 青インクのペンの文字は、長田芳久氏が書いたものと思われる。黒インクや鉛筆の文字は誰が書いたか不詳。
** 黒インクのボールペンの文字は、佐々木謙が書いたものと思われる。
*** 岩礁番号および島名は井上（2023）（脚注 2）を基に、加筆修正した本稿の図 4 による。

込みがある。すべての写真の裏面が観察できたわけではないが、ほぼ同じ内容が写真周囲の台紙に黒色のボールペンで書き込まれていた（図 2）。この書き込みは冊子を作成した佐々木謙の筆跡と一致する。写真の裏面の書き込みは同氏の筆跡とは異なっており、写真を台紙に貼付する際に裏面の書き込みを台紙に書き写したものと思われる。

これらの写真を「長田 8 ミリ映像」と比較して検討すると、写真③は 8 ミリ映像にあるスチール写真の接写映像と同一のものであった（図 3）。また、写真①～⑤の撮影地点は、「長田 8 ミリ映画」から推定された船の航行ルート上にあることが判明し（図 4）、すべての写真は 1940 年に長田芳久が撮影したものと考えられた。

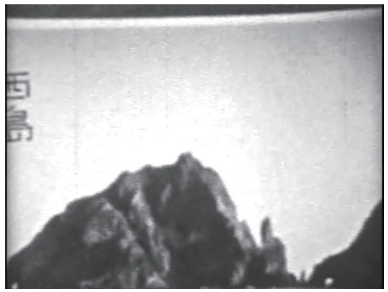

図 3　長田芳久撮影・編集の 8 ミリ映像にあるスチール写真の接写のカット（C55）。

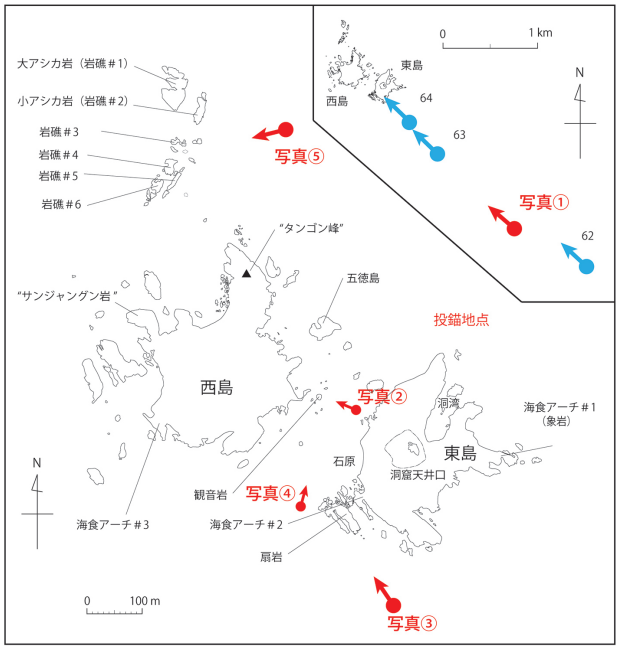

図 4　竹島写真①～⑤の撮影地点。井上（2023）（脚注 2）の図 10 を修正・加筆のうえ、竹島写真①～⑤の撮影地点を示す。

以下、「長田 8 ミリ映画」と対比しながら、写真①～⑤について述べる。島・岩の名称、岩礁番号、長田 8 ミリ映画のカット番号は井上（2023）で用いた番号である[3]。なお、今回は地図に海食アーチ＃ 1 ～ 3 を追加した。

（1）写真①

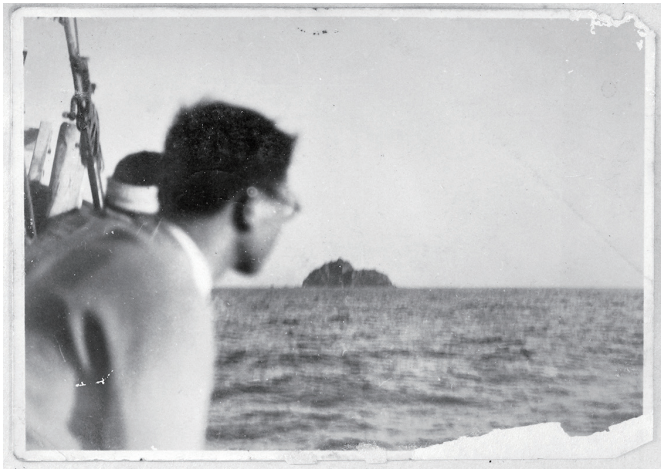

図 5　佐々木謙編集『竹島記』冊子にある竹島写真①。

右舷前方に竹島が見え、右舷に 2 人の男が島を眺めている。後方の人物は頭に白い鉢巻をしており、船の関係者と思われる。前方の人物は眼鏡を掛けており、白い襟のあるシャツの上にやや濃い色の上着を羽織っているように見える。髪型をみると、耳は完全に出ており、襟足はスッキリしていて、やや刈り上げているように見える。人物の後方には、船の肋骨材と思える部分と、マストを固定するシュラウドの一部が認められる。

写真の映像から判断して、東島の南東約 2 kmの地点付近から北西に向けて撮影されたものである。

写真の右上と右下に乳剤層の剥離があり、下層の白いバライタ層が露出している。また下縁の一部には別の写真の紙の一部が貼り付いている。

アルバムには「夜明けにみゆるリャンコ島」との書き込みがある。

［長田 8 ミリ映画との比較］

夜が明けて遠方に竹島が見えてきた頃に撮影されたものである。この撮影地点は、映画の C62 と C63 との間と考えられる。

3　井上『前掲書』（註 2）46 ページおよび 55 ～ 60 ページ。